The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	序論
Author(s)	高安, 啓介
Citation	a+a 美学研究. 2017, 11, p. 8-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90129
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

序論

成熟した社会においてデザインは文化であり、目先の利益に走りすぎない余裕こそが新しい価値を生み出すのならば、デザインを文化として育てていくうえでデザイン研究もまた欠かせない。本特集は、気鋭の研究者の論考をとおして、今後のデザイン研究にも生かされる視点をあらわしている。一章から四章までの各章は、異なる地域のデザイン文化を比較するときに有効な視点であり、五章は、異なる地域のあいだのデザイン交流にたいする見かたの例をおさめている。各章の導入の文章において、何が考慮されるべきか、何が考察されるべきか、要点をあげているので、問題にたいする見通しを得ることができる。各論考は、読者をすぐさま問題へと導くだろう。偶然この冊子を手に取ってしまった皆さんにも新しい発見があるにちがいない。

本論集は、大阪大学美学研究室で長く指導されてきた藤田治彦先生のご功績をしのんで組まれた。執筆者は、先生のもとで学んだり、研究の機会をあたえられたりした、若手から中堅にかけての研究者である。藤田先生はこれまで多くの共同研究を主宰し、日本のデザイン研究者につぎつぎと共通の目標をあたえてきた。藤田先生は、国内外の研究者にたいして分け隔てなく接して、研究分野の発展に大きく貢献された。学問の国際化のために孤軍奮闘されていたと言ってもいい。過去の共同研究の成果はすでに公刊されているが、主要なテーマの一覧があったらどんなに良いだろうと思った。教育の場においては学生たちに興味をうながす教本として役に立つ。研究の場においては緒についた研究を引き継ぐための覚書として役に立つ。以上の必要から本冊子が生まれた。

藤田治彦先生ご自身の業績をとおしてみると幾つかの筋道をたどることができる。建築研究からピクチャレスク研究へと向かい、近代デザインの原点をみすえるためにウィリアム・モリスおよびアーツ・アンド・クラフツ研究をおこなったあと、日本の近代工芸運動をとらえるべく、柳宗悦を中心とした民藝運動の研究におよんだ。同時にまた、意匠の語を鍵とした日本の美学思想研究をおこない、日本の近現代のデザインの歴史をおさえて、現在では視野をさらにアジアの国々の造形活動にまで広げている。このような研究の広がりをうながしていきたのは比較の考えである。言うまでもないが、各地域のデザイン文化の特徴は、比較を通してしか分からなない。本特集は、先生がこれまで比較デザイン研究のなかで提示してきた比較の視点の幾つかを一覧できるようにしている。

デザインにかかわる刊行物はとくに伝達形式においても気をつかうべきだろうが、研究者はそう思っても考えをなかなか実現できない。今回の紀要のリニューアルにあたっては松本工房の松本久木さんと何度も会って作業を進めることができたので、私としては満足のいく仕上がりとなった。執筆者の皆さんには無理を言って急いでいただいたおかげで短期間で完成させることができた。ご協力くださった皆さんにお礼を申し上げるとともに、大阪大学美学研究室をデザイン研究の一つの拠点へと育て上げた藤田治彦先生にこの特集号をささげたい。

高安啓介